Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（東　海）2003年9月

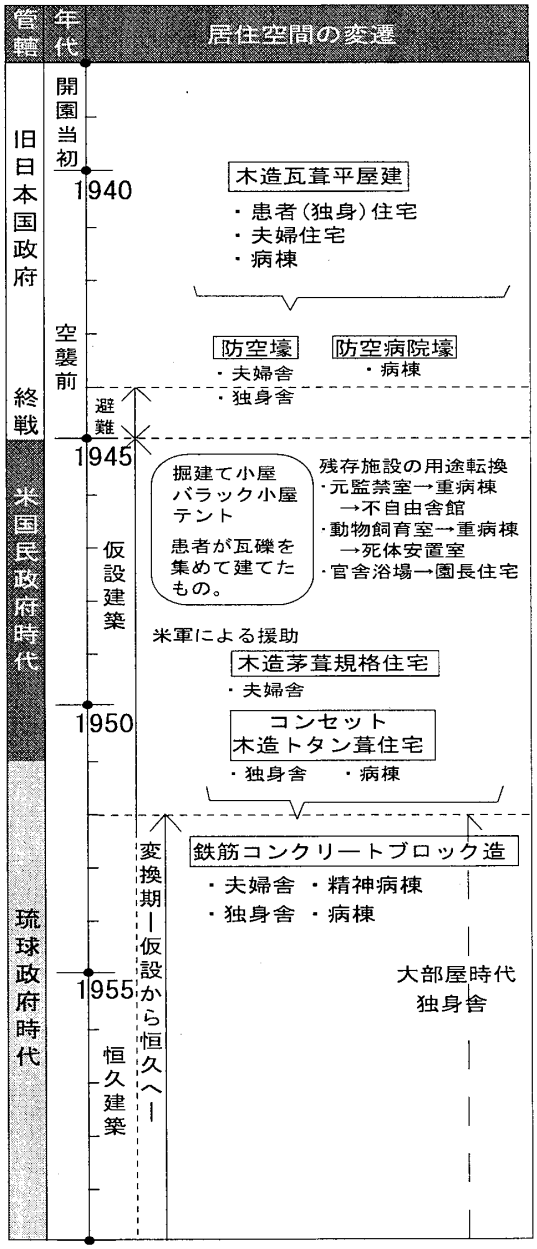
ハンセン病療養施設の歴史的変遷に関する研究　その2
－国立療養所沖縄愛楽園の事例－

正会員　○原しのぶ*
同　　友清貴和**
同　　脇田正恵***

ハンセン病　沖縄県　療養所　居住空間　変遷

1．はじめに

前稿では、沖縄県名護市にある国立療養所沖縄愛楽園において、主に建物配置の変遷についてまとめた。本稿では、同療養所における前稿の配置計画をもとに居住空間の変遷についてまとめる。



【図1】居住空間の変遷

2．居住空間の変遷【図1】

◇開園当初（1938～1943年）

居住棟は、1棟当り165㎡木造瓦葺平屋建て【図2】。10棟中4棟は女子寮、6棟は男子寮であった。1棟5室に分け、中央の1室が食堂。夫婦舎、少年舎もあり自治的に共同生活していた。

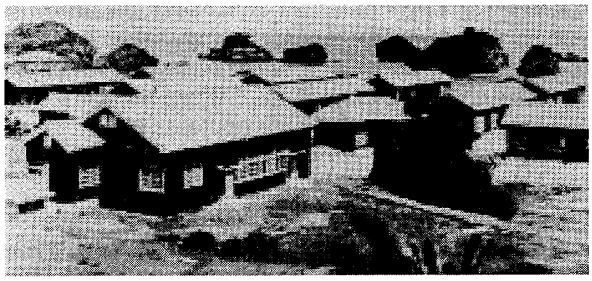


図2　木造瓦葺平屋住宅（居住者棟）

◇沖縄戦、空襲前（1944～1945）【図3】

戦争の悪化に伴い、防空壕の建設が入所者によって行われた。愛楽園内に重病者【図3】、保育所、医局用の壕が合わせて約60ヶ所作られた。

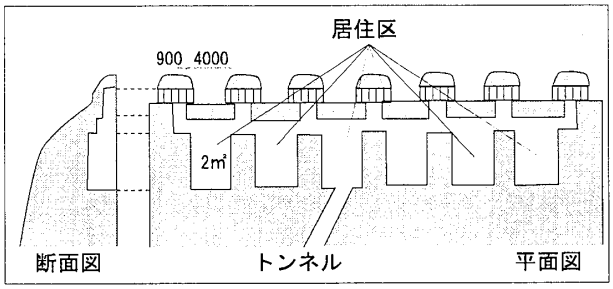


図3　横穴防空壕

◇琉球列島米国民政府時代（1946～1951）

廃墟に帰した愛楽園は、入所者自ら焼け残りの材料を拾い集め、バラック、掘建て小屋をつくった。夫婦舎は2人の、独身者は気の合った者同士が一緒になって雨露をしのぐ程度の掘建て小屋を建てた。1946年になると米軍から譲り受けたコンセット資材を使い、若者が主になって病棟や居住棟の組み立て作業が始まる。

コンセット【図4,5】は、フィートを用いて設計され、屋根はアーチ型のトタン葺、アーチとアーチの間が4フィート（約1.2m）ある。床はベニヤ板張りで床幅は20フィート（約6m）であった。出入り口は2ヶ所つけられ

Study of Historical Transformation of Sanitarium for Hansen's Disease

WAKIDA Masae,TOMOKIYO Takakazu,HARA Shinobu

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

コンセット約39棟
1棟　約92.4㎡
<用途>
本館事務所
礼拝堂
治療棟
病棟（独身者）
車庫　等

図4　コンセット

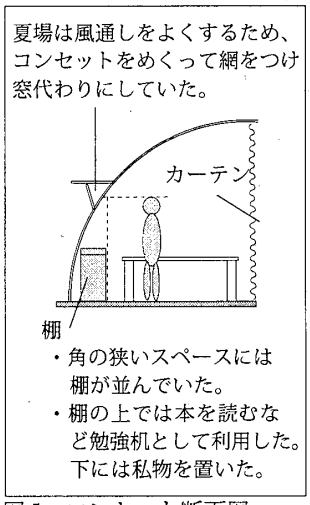


図5　コンセット断面図

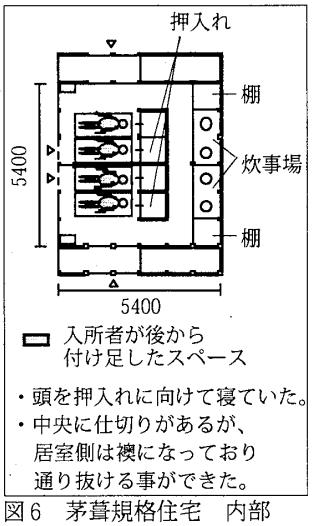


図6　茅葺規格住宅　内部

茅葺規格住宅
1棟　約29.7㎡
<用途>
病棟（夫婦者）
精神病棟
倉庫

図7　茅葺規格住宅

ており、1つのコンセットに20～30人の入所者が生活していた。真ん中がカーテンで仕切られ、2列に並び両端に頭を向けて寝ていた。入口近くには食堂として利用するスペースが設けられ、頭のぶつかってしまうような場所にある余分なスペースには棚が並べられていた。

1947年になると夫婦たちの仮住宅建設が進められ、1棟2世帯入居、間口18フィート（約5.4m）奥行き18フィートの茅葺規格住宅【図6,7】ができた。茅葺規格住宅は、壁はテントを切り張りしたしたままで、台所は床もなく砂地に足を突っ込み、竈は石を3個置いただけで、いつも砂誇りが舞っていた。入所者の話によると、茅葺規格住宅で生活していた人たちは、それぞれ自分たちの手で後からスペースを付け足し生活の場を広げていったという。2世帯が暮らすには約9坪の茅葺規格住宅は非常に狭かったということが分かる。

◇琉球政府時代

恒久建築がスタートし2階建ての独身棟【図8】が建

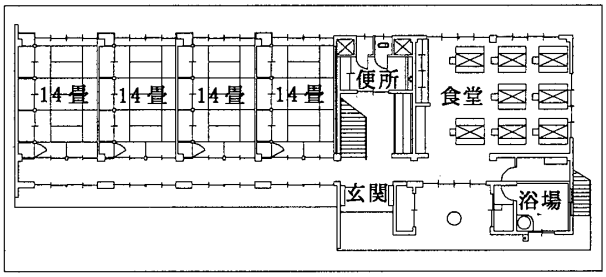


図8　独身寮1階平面図（14畳大部屋）

設された。独身棟は、1階には14畳の大部屋が4部屋、便所、食堂、浴場がついていて、1部屋の定員が7人であった。2階も1階と同様間口2間奥行き3間半の4つの大部屋が並んでいた。14畳の大部屋では畳み2畳をI字型に敷いたスペースが一人当りのスペースとして使われていた。男女の部屋は分かれていたが、年齢層や趣味、好み性格的にも全く異なるものが同じ部屋で生活をしなければならなくトラブルが絶えなかったという。

1960年頃から脱大部屋機運が高まり、1979年鉄筋コンクリート平屋建て、1棟8部屋の4畳半の個室制、箪笥、押し入れ、シャワー、トイレ付の、独身不自由者棟60床が完成した。

7．まとめ

愛楽園の居住空間は、開園当初木造瓦葺住宅平屋建てで、内部空間についての詳細はわからない。しかし、入所者数が定員数を超えていることから雑居生活をしていたと考えられる。戦争が始まると、防空壕での生活が始まる。戦後、入所者たちは居住空間を確保するため自ら瓦礫を集め掘建て小屋を建てる。その後米軍の援助を受けコンセットや茅葺住宅での生活となる。これらはいずれも仮設建築であり戦後の混乱期を一時回避するためものであった。琉球政府時代になると入所者の寮舎も仮設建築から恒久建築へと移っていく。しかし、14畳の大部屋に7人での雑居生活であった。その後、個室化への要求が高まり1979年に個室制の独身不自由者棟が完成する。変遷の特徴として、戦後に仮設建築によって一時的に居住空間を確保した時代と、恒久建築により安定した居住空間を獲得し、大部屋から個室へと変化していった時代の2つに分けられる。

愛楽園の居住空間は、沖縄県のハンセン病政策より、時代背景とハンセン病行政を行う政府に影響を受けていることが明らかになった。

今後の検討として、今回明らかになった療養所の居住空間で入所者がどのような生活をしていたのかを明らかにしていきたい。

－参考文献－
・平成13年度修士論文
　ハンセン病療養施設の建築計画に関する研究　西室田　周作
・命ひたすら　療養50年史国立療養所沖縄愛楽園入園者自治会
・沖縄における癩管理の現状　　犀川　一夫

*　鹿児島大学大学院　研究生
**　鹿児島大学教授・工博
***　鹿児島大学大学院　博士前期課程

* Research Student,Dept.of architecture,Kagoshima univ
** Prof.,Dept.of architecture,Kagoshima univ,Dr.Eng
*** Gradiate school,Dept.of architecture,Kagoshima univ

NII-Electronic Library Service